

令和 2 年 5 月 30 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03174

研究課題名(和文)自由フランスによる国内レジスタンスの包摂過程に関する研究

研究課題名(英文)A Study on the inclusive process of interior resistance movements by Free France

研究代表者

渡辺 和行(WATANABE, Kazuyuki)

京都橘大学・文学部・教授

研究者番号：10167108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：国内レジスタンスが大同団結できるには、自由フランスの情報機関たる中央情報行動局(BCRA)の能動的な働きかけや、ドゴールの個人代表ジャン・ムーランの献身的で介入的な行動があった。ロンドンから国内レジスタンスへの連絡回路には、BCRAルートとムーラン・ルートの2つがあった。BCRAが北部占領地区のレジスタンスの統一を担当し、ムーランは南部自由地区の統一を担当したが、両者の実態は競合であった。この2つのルートが合流して、ムーランを議長とする全国抵抗評議会(CNR)が誕生した。CNR誕生に至る過程、つまり自由フランスと国内レジスタンスとの協力・反発・齟齬などの関係を解明した点が成果と言いつる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二次世界大戦期フランスのレジスタンスについて、従来の研究は国内レジスタンスの研究に偏りがちであり、国外レジスタンスの代表である自由フランスの研究は1990年代にやっと本格化したという状況であった。それゆえ、従来の研究は国内レジスタンスと国外レジスタンスとの関係という視点は希薄であった。そこに切り込んだことが本研究の学術的な特色である。本研究によって、従来の国内レジスタンスの英雄的で自己犠牲的な闘いという歴史に加えて、自由フランスから国内レジスタンスへの能動的にして介入的な働きかけと、国内レジスタンスの自由フランスへの反感や反発などを正當に評価した等身大のレジスタンス史像が呈示されるだろう。

研究成果の概要(英文)：Unity of movements of French Resistance was realized by Intelligence Service of Free France(BCRA) and Jean Moulin who was a representative of General de Gaulle. Active and aggressive intervention of Free France led to the unity of interior French Resistants. On one hand, Jean Moulin achieved the unity of Resistance in non-occupied France. On the other hand, Pierre Brossolette who belonged to BCRA was engaged in uniting the Resistance in occupied France. Two channels of uniting French Resistants just intersected each other. In consequence, Jean Moulin held the general assembly of CNR on May 27, 1943 at Paris. However, there were conflicts and disagreements between Moulin and leaders of interior Resistants. I would solve subtle relations between Free France and interior Resistance.

研究分野：フランス近現代史

キーワード：シャルル・ドゴール ジャン・ムーラン ピエール・プロソレット アンリ・フレネ 中央情報行動局
自由フランス 全国抵抗評議会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1. 研究開始当初の背景

ドゴール率いる自由フランスは、主権回復のために、領土の獲得、国民の支持、中央政府の樹立という主権の三要素を戦い取ったが、一番困難なのはの任務であった。はアメリカ政府が臨時政府承認の必須条件としていただけに重要であった。この重大任務に携わったのが、自由フランスの情報機関、中央情報行動局(BCRA)とドゴールの名代ジャン・ムーランである。つまり、自由フランスと国内レジスタンスを架橋し、国内の抵抗勢力を統一してドゴールを支持させたのは、BCRAとムーランの行動であった。BCRAとムーランの能動的で介入的な働きかけを解明することで、従来の国内レジスタンスの英雄的で自己犠牲的な闘いという歴史に加えて、自由フランスからの働きかけに対する国内レジスタンスの反感や反発などを正當に評価した等身大のレジスタンス史像が呈示されるはずである。というのは、第二次大戦期フランスのレジスタンスについて、従来の研究は国内レジスタンスの研究に傾きがちであり、国外レジスタンスの代表である自由フランスの研究は1990年代にやっと本格化したという状況であったからである。それゆえ、これまでの研究は国内レジスタンスと国外レジスタンスとの関係という視点は希薄であった。そこに切り込んだことが本研究の学術的な特色であった。

研究史を振り返ると、1960年代までは国内レジスタンスの研究が圧倒的に多く、日本からの関心は共産党を中心とした国内レジスタンスに注がれた。さらに、レジスタンス研究は、国民総抵抗神話としてのレジスタンスを顕彰することで、引き裂かれていた国民の記憶を覆い隠す国民統合の道具となり、栄光のレジスタンス神話の形成に寄与した。しかも、レジスタンスを顕彰することは、結果的に自由フランスの首長ドゴールを称えることになり、それは、第五共和政の初代大統領ドゴールとドゴール派政党の正統性にも繋がった。こうした状況が、研究者の自由フランスに対する関心を削ぐことになった。さらに、1970-90年代にはヴィシー政権の対独協力に光があてられ、次いで1980年代から始まった「ユダヤ人狩り」に関与した3つの戦犯裁判によってユダヤ人迫害の問題に関心が移り、レジスタンス研究は下火になった。それでも、フランス本国では1970年のドゴール死去後に本格的な自由フランス研究が始まり、とりわけ1990年代からシンポジウムや研究書・事典の編纂などが相継いだ、わが国の自由フランス研究は低調なままであり、フランス本国の研究に50年の遅れをとった。

これを補ったのが、2017年(平成29年)に刊行した拙著『ドゴールと自由フランス 主権回復のレジスタンス』である。拙著は日本人の手になる最初の自由フランス研究であるが、フランス・レジスタンスの研究も翻訳以外には、淡徳三郎『レジスタンス：第二次大戦におけるフランス市民の対独抵抗史』(新人物往来社、1970年)しかない研究状況であった。1960年代までの研究成果を消化した淡氏の研究は、自由フランスにも言及しているが、やはり国内レジスタンスの比重が高く、国内レジスタンスと国外レジスタンスたる自由フランスとの関係という視点は弱いと言わざるをえない。

ポスト冷戦とマルクス主義パラダイムの影響力低下によって、共産党を中心とした国内レジスタンス研究も低調なままであるが、21世紀の今日、これまで行われてきた国内レジスタンス・ヴィシー政府・自由フランスの研究のジンテーゼが必要となっている。以上が研究開始当初の研究状況である。

2. 研究の目的

上述したように、従来のレジスタンス史研究の主流は、自由フランスの研究ではなく国内レジスタンスの研究であり、しかも国内レジスタンス各派の英雄的で自己犠牲的な戦いに終始しがちであった。こうした趨勢が、栄光のレジスタンス神話の土台になったことは言うまでもない。しかし、国内レジスタンス各派の士気は高かったとはいえ、資金・装備・情報などの面で困難に直面しており、自由フランスの支援を必要としていた。自由フランスの能動的で時には介入的な働きかけこそ、国内レジスタンスの大同団結をもたらしたのである。

国外レジスタンス(自由フランス)と国内レジスタンスとの関係という論点は、フランス本国でも自由フランス研究が国内レジスタンスの研究と比べて相対的に遅れていたこともあり、研究が進んでいない分野である。2013年に出版されたオリヴィエ・ウィヴィオルカのレジスタンス史(Olivier Wieviorka, *Histoire de la Résistance 1940-1944*, Paris, Perrin, 2013, 575p.)も、こうした点まで踏み込んでいないことを指摘しておこう。

私は平成26~28年度に科研費を得て、「自由フランスと主権回復の闘いに関する総合的研究」(基盤研究C一般、課題番号26370858)を推進し、渡辺和行『ドゴールと自由フランス 主権回復のレジスタンス』(昭和堂、2017年)として出版した。この研究は、自由フランスの闘いが「主権回復のレジスタンス」であることに着目して、自由フランスが主権の三要素をいかにして闘い取ったのかに視点を据えた。すなわち、領土をどのようにして獲得し支配していったのか、国民の支持をどのようにして獲得していったのか、中央政府をいかにして組織し政府の承認を得たのかという3点である。私は、国民の支持調達の象徴的な事例として、国内レジスタンス諸組織の統一体である全国抵抗評議会(CNR)の誕生(1943年5月)とCNRがドゴール支持を表明した点に注目してきた。しかし、国内レジスタンスが大同団結できるにはBCRAの能動的な働きかけや、ドゴールおよび国民委員会の代理ジャン・ムーランの献身的で介入的な行動があった。つまり、国内レジスタンスと国外レジスタンスを事実上結びつけたのは、ドゴー

ルの承認を得ていたBCRAとジャン・ムーランという2つの回路による行動であった。

国内と国外のレジスタンス組織を結びつけていたのがBCRAであり、資金・武器・情報などのセンターになっていた。そこで、本研究課題においては、国内レジスタンスの統一組織であるCNRの誕生に至るプロセスを跡づけ、CNR設立後も残る国内レジスタンスと国外レジスタンスとの意見対立や国内レジスタンス間の論争などにも目配りし、レジスタンス神話から距離を置いた等身大のレジスタンス史像を呈示することを目指した。

3. 研究の方法

本研究課題達成のために2つのルートからの解明を試みた。1つはBCRAの回路、もう1つはジャン・ムーランの回路である。当初の計画は次のようであった。3年計画の1年目にBCRAルートとジャン・ムーランのルートを解明し、北部占領地区のレジスタンス組織の統一過程を整理する。次いで2年目には、ムーラン・ルートの解明と南部自由地区のレジスタンス組織の統一過程を明らかにする。3年目には、両ルートが合流してCNRが誕生する過程を跡づける。つまり、ロンドンで誕生した自由フランスが国内レジスタンスを包摂していく過程とは、自由フランスが国内レジスタンスの自主性を奪っていく過程でもあり、従来のレジスタンス史像に修正を迫ることができるという見通しのもとに研究を進めた。

ロンドンから国内レジスタンスへの連絡回路には、上述したようにBCRAルートと、ムーラン・ルートの2つがあった。BCRAのピエール・プロソレットが北部占領地区のレジスタンスの統一を担当し、ムーランは南部自由地区のレジスタンスの統一を担当したが、両者の実態は分業や協業ではなくて競業であった。ともあれ、この2つのルートが合流して、ムーランを議長とするCNRが誕生するのである。それゆえ、本研究ではまずBCRAという組織の実態および制度の変遷を明らかにする必要がある。幸いなことに、2009年にBCRAに関する重要文献が刊行されていた。セバスティアン・アルベルテリの博士論文『ドゴール將軍の情報機関 BCRA 1940-1944』(Sébastien Albertelli, *Les services secrets du général de Gaulle: Le BCRA 1940-1944*, Perrin, Paris, 2009, 617p.)がそれである。アルベルテリの研究によって、BCRAという組織の実態や職員その他の理解が大きく進んだが、フランス本国でも、BCRAに関する本格的な研究が2009年にやっと出版されたということは、本研究がフランスでも新しいテーマであることを示している。

BCRAの組織実態の解明と平行して、BCRA指導者の回想録やBCRAのエージェントとして活動した人物の回顧録、および交渉相手となった国内レジスタンス指導者の回想録などを交差させることで、具体的な行動や心理、国内外レジスタンス指導者の会合・連携・反目などを補った。BCRA側の回想録には局長のパスシー大佐、局長補佐のピエール・プロソレット、レミ(ノートルダム信心会の指導者)などのものがあり、国内レジスタンス指導者の回想録には、コンパの指導者アンリ・フレネとクロード・ブルデ、クリスチアン・ピノー(北部解放の指導者)、共和連盟のドビュ＝プリデル、国民戦線のピエール・ヴィヨン、義勇遊撃隊のモーリス・クリージェル、南部解放のエマニュエル・ダスティエ・ド・ラ・ヴィジュリのものなどがある。これらの回想録を先行研究によって補いつつ、内外レジスタンス指導者の感情的な齟齬、方針の相違を乗り越えながら小異を捨てて大同についた経緯を明らかにすることを目指した。

次いで、今一つのルートであるジャン・ムーランの活動をフォローする必要がある。悲劇的な死を遂げたムーラン論は汗牛充棟の感があるが、重要な文献はムーランの助手であったダニエル・コルディエの浩瀚な研究である。ダニエル・コルディエ『ジャン・ムーラン 地下納骨所の共和国』(Daniel Cordier, *Jean Moulin: la République des catacombes*, 2 tomes, Paris, 2011, 1859p.)によって、ムーランの行動の全貌が明らかになる。それを通して、国内レジスタンス指導者との不和・葛藤やBCRAとの権限争いなども視野に入れることが可能となった。最終的に、ムーランのリーダーシップでCNRが創設されるが、国内レジスタンス指導者との方針をめぐるもつれなどは潜在したままであり、パリ解放まで燻り続けることになる。そうした国内外レジスタンスの闘争的同盟関係が解明できることは、国民が打って一丸となってドイツと戦ったという栄光のレジスタンス神話を脱構築することに繋がり、さらには共和国の再建や臨時政府の国際的承認という次元でも遅れをとった国内レジスタンス諸組織がドゴールの競争相手ではなかったことの解明にも繋がる。それは、国内レジスタンスの主体性や自立性を強調する従来のレジスタンス史像に修正を迫ること、必定である。

平成29年度は先行研究を収集しつつ、BCRAの基本情報の把握を目指した。そのために、自由フランスやBCRAに関する基本文献を収集しつつ読破した。まずは、前述したアルベルテリのBCRA基本文献、併せてBCRAの局長であったパスシー大佐の回想録(*Colonel Passy, Mémoires de chef des services secrets de la France libre*, Paris, 2000, 806p. 『自由フランス情報局長の回想録』)、また、ウィヴィオルカの最新のレジスタンス研究(*Olivier Wiewiorka, Histoire de la Résistance 1940-1944*, Paris, 2013, 574p.)も精読した。これらの文献を通して全体を俯瞰する視座をクリアにしつつ一次史料も含めた収集に努めた。主な一次史料には、自由フランスの官報(*Journal officiel de la France libre: Lois et décrets*, Nos.1-8, 1941-1942)やBBCからの自由フランスの放送録(『自由の声、こちらロンドン 1940-1944』(Jean-Louis Crémieux-Brilhac dir., *Les voix de la liberté, Ici Londres 1940-1944*, 5 tomes, Paris, 1975-1976.)などがある。

平成 30 年度の 2 年目は国内レジスタンスを統一に向かわせたもう一つの回路、ムーランの行動に焦点をあてた。ムーラン研究は、側近コルディエの上述した必須文献から始めた。

平成 31 年度の 3 年目は 2 つの回路が合流して C N R の設立に至る経緯と、自由フランスと国内レジスタンス諸組織との齟齬や不和について解明しつつ、ムーランのリーダーシップのもと、国内レジスタンス諸組織が自由フランスに包摂されていくプロセスを検討した。併せて、カリキュール事件とジャン・ムーラン事件という副産物の解明とも取り組んだ。

4 . 研究成果

本研究課題を遂行する過程で、カリキュール事件とジャン・ムーラン事件という重要な問題に遭遇した。これらの事件には、自由フランスと国内レジスタンスとの齟齬、すなわち、ムーランと南部の有力なレジスタンス組織であるコンバ指導者のアンリ・フレネとの対立が絡んでおり、本研究課題を達成する上でも重要な論点であった。

しかも、カリキュール事件とジャン・ムーラン事件という 2 つの事件は、わが国ではほとんど知られていない事件である。前者の事件は、国内レジスタンス組織を C N R に統一した直後に起きた。カリキュール事件とは、ジャン・ムーランが 1943 年 6 月にリヨン郊外カリキュールで他のレジスタンス指導者とともにゲシュタポに逮捕され、ムーランが拷問死した事件である。事件当初よりムーランの逮捕に至る真相に関心が寄せられた。ムーランが逮捕されたのは、コンバの一員ルネ・アルディの裏切りによるものなのか、あるいは秘密軍をめぐるコンバとムーランとの主導権争いの結果なのかといった点でいまだに議論が続いている。最近の研究によると、カリキュール事件はアルディの裏切りとコンバ指導者の不注意とカリキュール会議に遅刻という偶然的な産物として生じたという説が有力である。

次にジャン・ムーラン事件である。戦後 50 年が近づいた 1990 年代に、ジャン・ムーラン事件が突発した。ジャン・ムーランは「隠れ共産主義者」であり、じつはソ連のスパイであったとか、いや、アメリカの手先であったなどという説である。このジャン・ムーラン事件も、コンバと関わっている。というのは、この事件の遠因として、コンバ指導者アンリ・フレネとムーランとの確執を指摘できるからである。

ジャン・ムーラン＝ソ連スパイ説は、ジャーナリストのティエリー・ウォルトンが旧ソ連の二文書、すなわち、ソ連スパイの文書である「ロビンソン文書」、およびフランスにおけるソ連スパイの責任者、レオポルト・トレパーの「尋問調書」を用いて、1993 年 1 月に出版した『大物のリクルート』(Thierry Wolton, *Le grand recrutement*, Garasset, Paris, 1993.) のなかで展開した説である。さらに、同年 2 月に『フィガロ・マガジヌ』(2 月 6 日号) が「ムーランはソ連のスパイだったのか?」、すなわち「ムーランはフランスを裏切ったのか?」と、ムーランを非難する記事を載せていた。

こうした中傷に対して、1993 年 5 月に浩瀚なジャン・ムーラン論を著したダニエル・コルディエが素早く反応した。コルディエは、1942 年 7 月から 43 年 6 月のムーラン逮捕までの 11 ヶ月間、助手としてムーランに仕えた側近であった。ウォルトンの本が出た 1993 年は、偶然の一致とはいえ、ムーランが創設した C N R とムーランの死の 50 周年にあたる年である。この記念すべき年に起きたムーラン批判を、コルディエは「歴史は危機にあり」(Daniel Cordier, *Jean Moulin, L'inconnu de Panthéon*, tome 3, Paris, 1993, p.9.) と捉えて反論した。

じつはウォルトン説の原型はアンリ・フレネに遡る。フレネはコンバのリーダーで、ムーランとは何かと対立した人物である。それゆえ、フレネとムーランという「二人の名前は、今日、レジスタンスを分裂させた重大な対立を象徴している」(Robert Belot, "Jean Moulin et Henri Frenay, les enjeux d'un affrontement" in Jean-Pierre Azéma dir., *Jean Moulin, face à l'Histoire*, Paris, 2000, p.163.) とまで言われるほどだ。

フレネがムーランを共産党と関わる人物だと指摘した最初は、朝鮮戦争が勃発して 1 ヶ月も経たない 1950 年 7 月 13 日のことである。フレネは、B C R A の元局長パッシーに宛てた書簡のなかで以下のように述べた。フレネは、ムーランの助手であったピエール・ムニエとロベール・シャンベロンが共産党の代議士になったことを指摘し、さらにムーランも含めて、彼らが 1936 年の人民戦線内閣の空軍大臣ピエール・コットの大臣官房にいたことに触れつつ、「私に言わせれば、ジャン・ムーランはフランスでは共産党の人間であった」(Colonel Passy, *Mémoires du chef des services secrets de la France libre*, Paris, 2000, p.777.) としたためだ。

次にフレネが発言したのは 1973 年のことである。この年、フレネが出した回想録『夜は明けるだろう』のなかで、彼はムーランの行動に 11 の疑問を提出した。これらの疑問を満たすフレネの回答は、「ジャン・ムーランはじつは共産党の人間であった」という仮説であり、「ジャン・ムーランは隠れ共産主義者か?」というものであった。ムーランが党员証を持っていたというわけではなく、ムーランの全行動は直接であれ間接であれ共産党に役立ったのだと、フレネは主張した(Henri Frenay, *La nuit finira, Mémoires de Résistance 1940-1945*, Paris, 1973, pp.563-566.)

フレネの主張を支持したのが、フレネの顧問弁護士でもあったシャルル・バンフレジであ

る。さらに、古代ギリシア史家のピエール・ヴィダル＝ナケが現代史の問題に介入したのは、1993年2月3日に放映されたテレビ番組「時代の歩み」が契機になっている。この番組は、「一点の疑いもないスパイたち、モスクワに仕えたフランス人、彼らは誰か」と題してティエリー・ウォルトンの本を取り上げ、ウォルトン自身も自説を展開していた。その後、ヴィダル＝ナケは、著名な歴史家もムーラン＝ソ連スパイ説を支持していることを知った。著名な歴史家とは、共産党史研究で令名の高いアニー・クリージェルやフランス革命史家のフランソワ・フュレである。

以上のように脚光を浴びたソ連スパイ説と異なり、アメリカの手先説を唱えたのは、ジャーナリストのジャック・ベナックである（Jacques Baynac, *Les secrets de l'affaire Jean Moulin*, Seuil, Paris, 1998.）。ベナックによれば、ムーランは、アメリカが支持するドゴールのライヴァル、ジロー將軍のためにドゴールを裏切ったというのだ。ジャン・ムーランはドゴール派の人間ではなくて、アメリカの情報機関と関係を持っていた。また、後述するカリユールでの逮捕についても、1943年6月18日から19日の夜、ムーランはアヴィニョンに落下傘降下したアメリカのスパイ、フレデリック・ブラウンと会ったが、ブラウンはゲシュタポに尾行されており、その結果、カリユールまでムーランも尾行されることになったというのである。つまり、ムーランは「裏切りの犠牲者ではなくて偶然の重なる犠牲者」（*Ibid.*, p.415.）として斃れた。ムーランの逮捕は自らがまいた種であり、それゆえベナックは、ギラン・ド・ベヌヴィル、ルネ・アルディなどのコンバの指導者はカリユール事件にはまったく責任がないことを示そうとしたのである。以上のようなベナック説に対して、コルディエが示したように、ブラウンの落下傘降下は、1943年6月20日であり、ムーランとの会合はありえなかった（Daniel Cordier, *Jean Moulin, la République des catacombes*, Paris, 1999, p.872.）。ベナックの立論の大前提は崩れた。

以上、ジャン・ムーラン事件の一端を紹介したが、1990年代にジャン・ムーラン事件と呼ばれる論争がなぜ起きたのだろうか。おそらく、グローバリズムの展開に対するカウンターとして文化ナショナリズムが刺激されたこと、戦後50年の到来で第二次世界大戦への関心が呼び覚まされ、戦争の記憶やレジスタンスの表象に関心が集中したこと、ソ連東欧圏の崩壊という状況があったからであろう。そうした中で、ジャン・ムーランをレジスタンスの英雄の地位から貶めようとする現代の反ドゴール戦線が生み出され、その戦線には、懐旧的なペタン派やリベラルな大西洋主義者、元スターリン主義者が集まったのである。

以上の重要な副産物の解明に時間を取られ、本研究課題のテーマである自由フランスによる国内レジスタンスの包摂過程の解明ははまだ完成を見ていない。それでも、ジャン・ムーランが領導した南ルートとピエール・プロソレットが主導した北ルート、そして南北ルートが合流してCNRの誕生に至る包摂過程の輪郭は明確になった。CNRは、ムーランとプロソレットとの主導権争い、国内レジスタンス指導者（とくにアンリ・フレネ）とムーランとの対立などを伴いつつ誕生したのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 40
2. 論文標題 新刊紹介『身体はだれのものか』昭和堂	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 クロノス（京都橘大学女性歴史文化研究所）	6. 最初と最後の頁 14-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 12
2. 論文標題 宮下雄一郎『フランス再興と国際秩序の構想』勁草書房	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日仏政治研究	6. 最初と最後の頁 41-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 なし
2. 論文標題 「正義の人」に支えられた自由への道	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 少女ファニーと運命の旅	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 なし
2. 論文標題 《アトリエ》の歴史的背景	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アトリエ	6. 最初と最後の頁 10-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 なし
2. 論文標題 ナチ占領下フランスの演劇と検閲官ヘラー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アンチゴース	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 なし
2. 論文標題 解説 ナチ占領下のフランス	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ジャック・シラク『フランスの正義、そしてホロコーストの記憶のために』明石書店	6. 最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 42
2. 論文標題 リディ・パスチアン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 クロノス	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 なし
2. 論文標題 第二次世界大戦と占領されたフランス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中野隆生・加藤玄編『フランスの歴史を知るための50章』明石書店	6. 最初と最後の頁 306-312
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺和行	4. 巻 なし
2. 論文標題 ヴィシー・シンドローム他4項目	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 越門勝彦・三宅岳史・川口茂雄編『現代フランス哲学入門』ミネルヴァ書房	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 渡辺和行	4. 発行年 2017年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 352
3. 書名 ドゴールと自由フランス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考